

氏名	荒木 菜見子 あらき なみこ
学位(専攻分野)	博士(学術)
学位記番号	博甲第999号
学位授与の日付	令和3年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	工芸科学研究科 建築学専攻
学位論文題目	岐阜駅前繊維問屋街から見る戦後市街地空間の形成過程に関する研究
審査委員	(主査)教授 中川 理 教授 清水重敦 准教授 赤松加寿江 准教授 大田省一

論文内容の要旨

本論文は、戦後の岐阜駅前において形成された都市空間について、その基幹産業を担った繊維問屋街に着目し、その商業空間の成立と変容を明らかにしたものである。それは、戦後復興期時における日本の都市空間形成において、一つの産業が共同化しながら商店・住宅の都市空間を形成した事例として重要な意味を持つと考えられる。

本論文ではその歴史的展開に沿って、3部にわたり論じた。第1部では、戦災により焦土となつた岐阜駅前に、1947(昭和22)年から建ち並んだバラックの簡易商店街であるハルピン街と、その発展形として建設された大ハルピン街住宅について分析した。当時の新聞記事や写真資料、行政文書などからそれらの建設の経緯と具体的な場所の特定、空間の把握をおこなった。これらの事業において、北満州からの引揚者集団が一人のリーダーを中心として組織化し、そのもとで自律的な都市形成がおこなわれた過程が明らかになった。

第2部では、ハルピン街・大ハルピン街の形成をふまえ、駅前繊維問屋街が成立した過程と、1950年代から全国でみられた都市不燃化運動と連動して、繊維問屋街が取り組んだ店舗の耐火建築化・共同建築化について分析した。当時の新聞記事や、防災建築街区造成事業に関する行政文書、計画図面などをもとに、建設された街区の具体的な空間把握をおこなった。そこでは、問屋街が事業を共同化することで建設が実現した実態が明らかにした。

第3部では、繊維問屋街の成長にともない求められることとなった、福利厚生の拡充を目指す事業の中で建設された従業員住宅について検証した。当時の新聞記事から事業の経緯をたどり、登記簿や地籍図、行政文書の分析をおこなうことで住宅の供給方法について明らかにした。ここではいわゆる企業の社宅とは異なり、繊維問屋街という中小企業者の集団が共同でおこなう住宅建設・供給であることによる、住宅供給、その後の土地建物の払下げの過程に、特徴を見出すことができた。

結論ではこれらの全3部を通して、戦後復興期における基本法や制度の空白期において、自律的に行われた都市形成の過程とその特徴を明らかにしたことを結論としてまとめた。この戦後岐阜における事例は、住空間の併設なども含む総合的な街区形成という展開において、戦後の「闇市」などは異なる都市空間形成として捉えていくべきものであり、またそれは、地方都市だから

こそ求められた特徴であったとも言えるものであった。さらにそれは、行政による誘導や支援の制度が整っていく過程と連動しながら、その制度的枠組みの形成に大きな影響を持ったものであったことも了解できた。

論文審査の結果の要旨

建築史分野の研究において、近年最も重要な研究テーマの一つになっているのは、群として建築や空間を社会との関係構造から捉える都市史の解明である。その中で、日本の近代を扱う領域では、戦前期から戦後期へと分析テーマが広がりつつあり、とりわけ終戦直後のいわゆる「闇市」が、その後の商業空間を中核とする日本の都市空間の基盤を作ったものとして着目されるようになっている。それは、都市空間形成を管理・支援する都市計画等の制度がいまだ整備されない時代における自律的な商業活動によるものであった。そこで、次のテーマになるのは、こうした活動が、その後の住宅制度も含んだ行政の制度的枠組みの中で、どのように消滅し、あるいは継続・変容することで、現代に繋がる都市空間を作り出すことになったのかという問いである。

本論文は、その問い合わせて、岐阜駅前の繊維問屋街という場所に着目することで、「闇市」以降の街区の形成と発展過程を明らかにしようとしたものである。明らかにしているのは、「闇市」と同様の質を持つと判断できる、引揚者による駅前の自律的マーケットであったハルピン街と、それを発展させ住宅も含めた開発を行った大ハルピン街の事業について（第1部）。さらに、これらの事業を踏まえて駅前に形成された繊維問屋街の形成とそこに見られた不燃化運動にともなう制度のもとに建設された集団的共同住宅と、その展開過程（第2部）。加えて、その問屋街の発展によって必要となった雇用者のための郊外に建設された住宅街の建設経緯とその内容、およびその後の住宅払下げの経緯についてである（第3部）。

ここで明らかにされたことは、一つには「闇市」と同様の自主的・自律的な活動によるマーケット建設が、空間形成の最初にありえたことである。しかし、1950年代から全国で都市不燃化運動とそれによる商店街の共同化・ビル化が取り組まれるようになると、そのマーケット（繊維問屋街）は、共同体としての性格を強め、組合を組織し、集団的な問屋街空間の建設を進めていくようになる。そして、この共同体化は、単なるマーケット空間の形成だけに留まらず、その従業員住宅のための郊外住宅地建設を進めるようになっていった。

この一連の、問屋街建設に見られた歴史的過程は、日本における戦後の商業空間の形成過程のあり方を示唆するものである。それは、空間建設の事業主体の形成、それと制度（耐火建築促進法等）との関係、街区形成と住宅開発の連関、などの論点を含むものであり、それらは従来の戦後都市史研究に見られない新たな視野を獲得することに繋がっている。もちろん本論文は、岐阜駅前という場所の限定、そして繊維問屋街という業態の限定ができたから、その過程を明快に解説することが可能となったのであり、多様な様態の商業空間にも同様な過程が見られるかは、さらに幅広い場所と商業空間での分析が求められることになるだろう。しかしいずれにせよ、この論文は、こうした検証作業の端緒を開いたものとなったのは確実であり、その意味において、近代都市史の研究上、大きな価値を持つものであると判断できる。

本論文の第1部、第2部の内容は、それぞれ申請者が筆頭著者となる以下の審査制度の確立した2つの論文においてすでに公表されている。

- (1) 荒木菜見子・中川理「わが国戦後復興期における岐阜駅前の商業及び住宅地区の形成過程に関する研究」日本建築学会計画系論文集、第 85 卷第 776 号、pp.2257-2266、2020 年 10 月、
- (2) 荒木菜見子・中川理「岐阜駅前纖維問屋街における街区建設の経緯に関する研究」日本建築学会計画系論文集、第 86 卷第 780 号、pp.675-685、2021 年 2 月

なお、第 3 部の内容については、申請者が筆頭著者となる以下の論文集の論文で公表される予定である。

荒木菜見子・中川理「戦後岐阜市における纖維問屋関連企業による従業員住宅建設に関する研究」（中川理+空想から計画へ編集委員会編『空想から計画へ—近代都市に埋もれた夢の発掘』思文閣出版）、2021 年 3 月